

【海外留学レポート】

イギリスでの外国語教育を考える

-英国レディング大学修士課程への留学-

Thinking about Foreign Language Education, England: Enrolling at the
Institute of Education, the University of Reading

バース大学大学院教育研究科英語教育専攻博士課程 城山 友孝

SHIROYAMA Tomotaka

(PhD Probationer Candidate in Education, the University of Bath, England)

キーワード：イギリス、英語教育学、大学院留学

はじめに

わたしが、第二言語習得という分野に関心を抱いたのは、高校3年生の時、偶然新聞で見たCOP10ユース会議¹交流会に参加したことがきっかけであった。このイベントにおいて、文化の異なる人たちと英語を通して一緒に物事に取り組む楽しさを経験した。同時に、中高6年間、勉強してきたのに英語が思うように話せないことも痛感した。大学に入学後も、英語は好きではあったが、実際のコミュニケーションの場では英語が十分に使えないことに悩まされ続けた。そうした中で、3年次の春休みに留学した英国で語学学校の先生が行ったコンピュータを用いた英語教育（Computer-Mediated Communication）の研究に参加したことが、自分の進路選択に大きな影響を与えたと思う。この一連の流れをまとめてみたいと思う。

大学院留学までの道

愛知大学に入学後、国際コミュニケーション学部の先生と進路の話をする中で、英語教授法に関する研究会のことを知った。この研究会で、中学、高校、大学の英語の授業では、大量のインプットをさせるがアウトプットの練習時間が少ないということが問題となっていることを知った。先生たちが新しい教授法を考案し、その効果を発表されるのを聞いていると、自分も第二言語習得について勉強したいという気持ちが強くなっていった。

3年生の春休みに、英語力を向上させる目的で英国のオックスフォードに語学留学をした。すでに、

¹ 生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）に向けて、世界の青年の交流と生物多様性に関する意識の向上等を目標とし、「生物多様性国際ユース会議 in 愛知 2010」が開催された。

英国大学院で勉強をしてみたいと決めていたからだ。語学学校では、午前中は文法・読解、プレゼンテーションスキル向上のクラスに出席し、午後からは、IELTSのテスト対策のクラスに参加した。授業後はオックスフォードにある書店で第二言語習得関係の書籍を購入し、読み進めた。渡英してしばらくすると、オックスフォード大学の言語学部で研究員をされている方と現役の修士課程の学生に教えていただく機会に恵まれた。研究員の方が行う授業は、文法や単語の成り立ちを言語学的に説明していくものだった。言語的なことに予備知識が不足していたり、海外での生活を満喫したいだけの学生にとっては、予習も多く厳しい授業であったが、わたしの場合は、渡英した当初から言語学に強い興味があったため、毎回楽しみな授業であった。また、修士課程の先生には、授業後に時間を取ってもらって、英国の学生生活や大学院での勉強に関していろいろと質問をしたり助言をいただいたりした。帰国後、語学学校で研究員の方が行っていた研究テーマであるコンピュータを用いた英語教育について、自分も英国の大学院で理論的に学び実際にリサーチも行いたいと思った。日本の英語教育でも、応用されるようになっていくのではないかと思ったからだ。英国では、1年で修士号が取れることも魅力であった。教育学の分野で定評のある大学院をいくつか絞って出願した。



(レディング大学 ロンドンロードキャンパス)

英国、レディング大学大学院での学生生活

グラスゴー大学とレディング大学から合格をいただいたが、最終的にレディング大学を選択した理由は、充実したコース内容に加えて、オックスフォードに近かったこと、キャンパス内で生活が完結できることや在籍していた大学の先生の知り合いの先生がいらっしやったことである。

英国の大学院のコースは、10月始まりが一般的である。私の研究科では、授業が9月の下旬に始まった。授業が始まって、数週間が経つと日々の予習に加えて Formative Assignment という課題が出された。この課題は、エッセイを書いたりプレゼンテーションを行ったりするもので担当の先生から細かいフィードバックを貰え、冬休みに課される課題に対して備えるものであった。そして、秋学期が終わり大量の課題を日本に持ち帰り時間をかけてゆっくり取り組んだ。

冬季休暇が終わり1月に英国に戻ると、春学期はそれまで以上に忙しい毎日だった。修士論文を作成するために必要な研究手法について学ぶ授業を受講しながら、一方では自分の論文のリサーチクエ

ステーションを明確にして、実験デザインも綿密に指導教官と打ち合わせをしなければいけなかった。受講科目の中では、大学の研究者が実際に行なっているリサーチの一部に参加する機会も与えられ大変勉強になった。リサーチは、ポーランド人の子どもの英語習得の過程を研究するもので、私たちは、2週間の時間が与えられ、テープを聞き、子どもたちの発音のどこが母語話者の発音と相違があるのかを一つ一つ検証していった。この研究に参加したことによって、研究を行う手順だけでなく、実験的な研究を実施するときに考慮すべきことを学べた。

夏学期は、修士の学生にとっては修論を書くためにとても重要な時期である。大半の英国の修士課程では、実証研究が推奨される。この期間は、学生たちは研究科長の許可を取りさえすれば自国に帰ってデータを採取することが認められている。私の研究科でも、大半の学生は1ヶ月ほどかけてデータを取るために帰国していた。私も、当初の研究計画では、日本に帰国してデータを収集する予定であったが、レディング大学の倫理委員会の審査の遅延、実験準備等に時間を取られてしまい、英国内で実験を実施しなければならなかった。実験を行ううえで最初の関門は、被験者の募集だった。私の場合は、少なくとも18人の英語を第二言語として使用している被験者を探す必要があった。最初は、大学のグローバル・オフィスからメールを回してもらい、自分もメールやフェイスブックを用いて被験者募集を行った。けれども、被験者数が十分に集まらず、5月の中旬になってしまった。それから、被験者になってくれそうな方々を探すために、太陽が出ている間はキャンパス内や友人がいるオックスフォードやレディング大学のオープンキャンパス等に参加しては被験者を探し続けた。振り返ると、この被験者を集める経験は自分の人生の中ではリサーチを越えて大きな意味があるものだったと思う。学年末でレポートやテストの準備で忙しい学生に、何回ものリサーチセッションに参加してもらうためには、自分の真剣さとそれを上手に伝えるコミュニケーション力が必要である。貴重な時間を割いて参加してくれた被験者には、本当に感謝している。被験者のひとりひとりの好意は、私が分析を進めるうえでも大きな励ましになってくれた。



(レディング大学 創立当時の学寮 Wantage Hall)

今後について

2017年12月にレディング大学大学院を卒業してから、既に9ヶ月が経った。10月から英国のバース大学大学院教育研究科博士課程に進学する予定である。修士論文を書く中で、さらに研究を深めたい領域が出てきたからである。語学留学したときに教えていただいた2人の先生たちのような研究者になりたいという憧れもある。博士課程の大学院を選択するなかで、コンピュータを用いた言語教育で有名なアイルランドのトリニティカレッジダブリン大学からも合格を貰った。随分、迷い学部時代の恩師、毛利元昭先生に尋ねた。恩師の先生から、「研究生活をするなかで、少なくとも、行き詰まった際にある程度健康的で戻ってこられるリフレッシュができる環境に、身を置くことが大切。」だと言われた。私は、先生から言葉を頂くまでは、せっかく努力をしてきたのだからトリニティカレッジダブリン大学で博士課程を有意義なものにしたかった。けれども、恩師の先生からのお言葉や少しは慣れている英国文化・言葉、レディング、オックスフォードにいるたくさんの友人のことやコース内容のことを考えるとバースの方が研究生活を送るなかで少しでも落ち着けると感じた。したがって、バース大学を選択した。留学をして数ヶ月は大変な時期もあると思われるが、できるだけ早くに少しでも自分が落ち着けそうな時間、場所を見つけることが留学を成功させる秘訣だと思う。



(ローマンバース 屋上)